LASTGAME

TAKA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＬＡＳＴＧＡＭＥ

【Ｎコード】
Ｎ０８８２Ｏ

【作者名】
ＴＡＫＡ

【あらすじ】
目が覚めると鎖に繋がれている自分・・・誰が何のために？同じ状況の５人と殺し合う異常なゲーム
ーーー「ＬＡＳＴＧＡＮＥ」が始まる・・・！！

（前書き）

まだ小説を書き始めて間もない自分の作品ですが、読んでいただけると嬉しいです。

昨日までいたはずの家には帰れず。
昨日まであったはずの自由は奪われ。
昨日まであったはずの心は壊れようとしていた・・・。

「ここはどこ？」
冷たい部屋で目が覚め呟いた。
「なぜこんな所に・・・うっ！！」
ここではじめて自分が鎖に繋がれているのに気づいた・・。
「く、鎖！？なんだよこれは・・・。」
全く記憶に無い場所。牢獄のような部屋。鎖に繋がれた自分。これだけで容易に想像出来た。
「もしかして俺・・・監禁されてる？」
このままここで死ぬ。そんな考えがよぎってしまったせいでとてつもない恐怖に襲われた。
「嫌だ！！死にたくない！！どこだここは！！？出せ！！」
すでに精神が乱れ始めていた俺に対して声が聞こえた。
「大丈夫だよ・・・。」
「誰だ！？」
声の方向を見ると暗いテレビに人が映っていた。
「大丈夫・・・。落ち着いて。」
そこには真面目そうな中年の男が映っていた。
混乱気味だった俺は「大丈夫」という言葉で落ち着きを取り戻した。
「これは一体どういうことなんだ！？」
画面の中の男は不気味に笑い言った。
「これはゲームなのだよ。」
この男の表情でこいつは自分の味方ではない。そう俺は確信した。
「このゲームに選ばれた君たちは実に運がいい。」

この監禁されるのがゲーム・・・。俺が狂うところをカメラで撮って売る気か・・・？
その時あることに気づいた。
「待て・・・いま君「たち」と言ったか・・・・・・？」
画面の中の男は第一印象とは全く違う狂った人間の表情で言った。
「そうさ・・・。このゲームに選ばれた人間は全員で5人だ。」
いままでだまって聞いていたが怒りがこみ上げてきた。
「テメェ！！何を考えている！？」
画面の中の男は言った。
「何をそんなに怒ってる？言っただろ？これはゲーム。我々が決めたルールに従ってればいいんだ。」
「ルール？・・・。」
画面の中の男は言った。
「このゲームは死のリスクがある。しかし、このゲームで勝てば君たちが一生手に入れることの無いほどの金を渡そう。」
この言葉にさらに怒りはこみ上げた。
「ふざけんな！！金の問題じゃねぇんだよ！！帰らせろ！！これは犯罪だぞ！！」
画面の中の男が得意げに言った。
「法律を作る者が犯罪をもみ消すなどたやすい事だよ・・・。」
その言葉で勘づいた。
「テメェ・・・。政府の・・・。」
ブチン！！テレビは切れ不気味な不安感が残った。
しばらくした後アナウンスが流れた。
「ゲームが開始されました参加者の皆さんは向かいの部屋に集まってください。」
手錠が外れ自由になった。
「ふぅ・・・。」
安心したのも、つかの間。向かいの部屋には手錠が5つあった。
さらにアナウンスは流れた。

「その手錠をつけしばらくお待ちください。」
他の5人もやってきた。
3人は素直に手錠をつけたが、俺ともう一人は素直に手錠を付けなかった。
「こんな逃走のチャンスは無いぜ。わざわざ自分から手錠かけるかっての。」
もう一人の手錠をしなかったやつが逃走しようとしたときアナウンスがながれた。
「なお、逃走を図った場合射殺という形をとらせていただきます。」
さっきのやつは・・・・血まみれで床に倒れていた。
最初からこのゲームは俺達の意思など無視するものだったたのか・・・。
とうとう俺もやむ終えず手錠を付けた。しかしこの手錠は前付けられていた手錠ては違っていた。
「なんだこれは・・・・？」
この手錠は知恵の輪の様になっていて頭を使えば外れるようだった。
この手錠に疑問をもって戸惑っているときにアナウンスが流れた。
「それではこのＬＡＳＴ　ＧＡＭＥのルール説明を致します。」
ＬＡＳＴ　ＧＡＭＥ・・・これがこのゲームの名前・・・。人生最後のゲームになるかもしれないからか・・・。
そんなことを考えてるうちにアナウンスな続いた。

「まず皆様には殺し合いをしてもらいます。」

・・・・・長い沈黙とつめたい空気が走った・・・。
そして手錠をしていた一人が叫んだ。
「ふざけるな！！こんなゲームやってられるか！！」
手錠を付けたまま出口の扉の破壊を試みていた。
ドン！！部屋に響き渡る銃声と共に胸を貫かれていた。
「く、くそ・・・・こんなゲームのために・・・。」

男は苦しそうに叫んだ。
「こんなゲームのために生きてんじゃねぇんだよ！！！！」
叫んだと同時に血を吐き出し動かなくなった・・・。
目の前で人が死んだはずなのに心の奥で自分が生き残る可能性があがったと考えていた。
「くそ・・・最低だ・・・・・。」
アナウンスの人は全く動揺せずに言った。
「説明を続けます。」
「殺し合いの際手錠は外しません。」
じゃあどうやって殺しあうんだ！？とみんな思っていた。
しかし、さっきの件でだれもうかつに動こうとしなかった。
「その手錠は知恵の輪の様になっていて頭をつかえばはずせます。」
「やはりか・・・。」
俺は少しまえからそう思いずっと外し方を考えていた。
「このゲームはいかに早く手錠を外すかが鍵になります。」
ガチャン。

・・・・手錠が外れた・・・・・。

ずっと外したかったはずなのに外してしまったことを後悔していた。
「これで勝てるかもしれないけど人は殺したくない・・・。」
小声でそうつぶやき手錠が外れてないフリをした・・・。
「それでは殺しあってください。」
なぜいちいち手錠を付けた状態で殺し合いをさせるんだ・・・？
その疑問は容易に想像出来た。
「俺らの慌て、狂い、恐れる姿がそんなに見たいのか・・・？」
そんな事に気がついても誰も助けてくれないのは分かっていた・・・

。
やはり生き残る道は殺しあうしかないのか？
いや・・・残りの奴らと協力すればなんとかなるかもしれない。
「みんなで協力して全員で脱出しないか・・・？」
ほかの３人にそう呼びかけてみた・・・。
しかし他の奴らは無反応で手錠を外そうとしている・・・。
「こいつら・・・・もう殺しあう気か・・・・・。」
完全に敵意を抱き、３人での殺し合いが始まった。

三人の殺し合いが始まって一分くらい経った。
とてつもない緊張感が続く・・・。
しかし俺は余裕があった。手錠をすでに外しているからだ。
いざ自分が殺されそうになったら手錠で動けないフリをして相手を油断させその隙に殺す。
という考えがあった。・・・しかし自分には人を殺す勇気も覚悟もない・・・。
ためらってその隙に殺されるのが一番怖かった・・・。
その時一人の男が手錠を外した。
「外れた！！！」
うれしそうに言って立ち上がった。
動いてないのは俺ともう一人の男。どっちを殺しにくる！？
「・・・どっちから殺そうか・・・？」
この男は完全に正気ではなく狂った笑みを浮かべていた。
自分が生き残れる。自分が勝つ。自分が金を手に入れる・・・と。
俺は目をつぶって自分が選ばれないことを祈った。
そして、男は言った。
「お前からだ・・・。」

「！！」
こっちを向いている・・・！！俺が殺られる・・・・。殺さなくてはいけないのか！？
そして男は俺に向かっていった。
「良かったな少し寿命が延びて。」
どうやら「お前からだ」ともう一人に向かっていったらしい
男はもう一人の男に近づいていった。
「どうやって殺してやろうか・・・？」
男はゆっくり、ゆっくりと近づいていく。
手錠を外せてないもう一人の男は恐怖の中言った。
「やめてくれ・・・助けてくれ・・・！！」
さらにもう一人の男は続けた。
「家には子供がいるんだ・・・妻がいるんだ・・・。」
手錠をつけたままもう一人の男は叫んだ。
「家族がいるんだぁぁぁぁぁぁ！！！」
手錠を外した男は近くに落ちていた石を振りかざし言った。
「俺には生きる可能性があるんだ。」
手錠を外した男は石を振りかざし、手錠を外せなかった男を殺した。

「・・・なんてことを。」
こんな残酷のものを見てしまたせいで気が狂いそうだった。
「お前・・・よくこんな事を簡単に！！」
手錠を外した男はこっちを向いていった。
「怒ってる暇は無いぜ・・・？」
手錠を外した男は石をもって俺の前に立った。
「俺が生き残るんだ。」
男は石を振り下ろした。

石は虚しく空を切った。
俺は手錠を外していたおかげでなんとかよける事が出来た。
「テメェ・・・！！手錠外してたのか！！」
男は落ち着いて続けた。
「お前も結局生き残りたいんだろ？人を殺しても。自分がかわいいんだろ？」
そう言って自分の身を守ろうとしていたのはみえみえだった。
「お前の策はみえみえなんだよ！！」
そう言って男の顎を思いっきり殴った。
男はぶっ飛んで壁で頭を打った・・・。
「ぐ・・・・あ・・・・」
しばらく経って男は動かなくなった。
「え・・・おい・・・・・。」
アナウンスが流れた。
「４人の死亡が確認されました。出口が開きます。」
「死亡・・・。おれが・・・殺した・・・？」
俺が人を殺した・・・？いやあっちが殴りかかってきたんだ・・・。
正当防衛だろ・・・。殺してない殺してない・・・。おれは・・・。

俺は悪くない・・・。

そう言い聞かせて出口をでた。

「ちくしょう！外れた！！」
スーツを着た男は札束を机に叩きつけた。
「おや。私は当たりましたよ。」

真面目そうな男達が十数名・・・。
モニターに映るＬＡＳＴ　ＧＡＭＥの部屋・・・。
「いやあ。ＬＡＳＴ　ＧＡＭＥは実にスリル満点でいいですな。」
「賭博するにはもってこいですな。」
国会議事堂の一室は異常に盛り上がっていた。

このゲームは裏の世界で続いていく・・・・・。
政治家の手によって・・・・・・・・。
どこまでも・・・・・・。

暗い部屋の一室・・・・・。
俺はＬＡＳＴ　ＧＡＭＥのあと口座に入金された金で生活してた。
仕事もせず部屋から出ない・・・・。
毎日毎日殺した時の夢を見る。
夢であってほしいこんな人生・・・・。
そう願ってもこれは現実。
俺の人生はとまっていた。
結局あのゲームは俺にとって人生最後のゲームだった。
体だけしか生きていない。

心はあの時無くしてしまった。
この苦しみは生きている限り続いていく・・・・。
自分の心によって・・・・・・・。
どこまでも・・・・・・・。

どこまでも。

Fin

（後書き）

是非自分が書いた他の作品も読んでください。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0882o/

LASTGAME

2010年10月10日00時50分発行